

去年今年西に東に芝居観て

二 村 文 人

○12月24日(木) 歳末恒例、京都・南座の顔見世興行。私にとっては、八年振り二回目。

前回は、鷹治郎一世一代の「酒屋」のお園が珍しかった。その時宗岸を勤めた仁左衛門の健在なのがうれしい。二階上手寄りの棧敷。

こともないだろう。○『喜撰』33分。三津五郎の襲名披露狂言。先月、歌舞伎座で、これにお梶で付き合った歌右衛門が、千秋楽に転んで腕を折ってしまったほど、そのくらい軽々と踊る。ここで、河原町の「ひさご」から蒸し寿司の出前が届く。燗の出来るカップ酒を飲みながら、これを食べていると、少々安直だが、昔の芝居茶屋の気分が味わえる。

も急なため、全体に圧縮された感で、芝居の密度が濃くなる。4時30分、夜の部開幕。

○『松平長七郎』(馬切り)。仁左衛門の顔見世三十五年連続出演を記念する演し物。わずか17分間の、しかも長七郎がわがまま振りを発揮して、千両箱を横取りするという、まことに他愛ない内容で、現在なら、仁左衛門以外の役者では、客が承知しまい。もう見る

良弁に田之助の落の方。近代の歌舞伎が、上品であることを求めたところに成ったような作品。江戸歌舞伎のもつ猥雑なエネルギーからは程遠い。背景は立派、熱演がかえって退屈。④『三人吉三』26分。お嬢菊五郎、お坊孝夫、和尚団十郎。「大川端」だけなので物足りない。9時前にハネる。例年、朝10時から夜10時まで、昼夜五本ずつ狂言の並ぶ強行日程だが、今年は大分早い。丁度、クリスマス・イヴ、街は若者達でにぎわっている。

○『松平長七郎』(馬切り)。仁左衛門の顔見世三十五年連続出演を記念する演し物。わずか17分間の、しかも長七郎がわがまま振りを発揮して、千両箱を横取りするという、まことに他愛ない内容で、現在なら、仁左衛門以外の役者では、客が承知しまい。もう見る

『勧進帳』72分。富十郎の弁慶、福助の富樫に扇雀の義経。大きな目をむき、汗びっしょりになって、ひたすら義経のために働く弁慶という印象。後で、楽屋内に詳しい人から、ひどく体調が悪いと聞かされて驚く。とてもそうは見えない。⑤『二月堂』47分。扇雀の

○1月4日(月) 普通なら今日から仕事始め。そこは教師の特権、歌舞伎座の初芝居。顔見世や楽屋入まで清水に 吉右衛門

が目を引く。○『対面』50分。新春早々、仁左衛門の元氣な祐経に對面出来る幸せ。○『勸進帳』75分。楽屋内で不仲を噂される幸四郎と吉右衛門の兄弟が、富樫と弁慶で對決(?)。それに玉三郎が義経で加わるのも珍しい。吉右衛門の弁慶は、ドロッとした目。動きも富十郎ほど大きくなく、貫禄で見せる。自分が富樫なら、こんな重量感あふれる弁慶を相手にしては、とてもかなわないだろうなと思う。玉三郎は、ジワのくるほど姿は美しいが、声に義経の氣品が感じられない。

○『川面法眼館』(四の切)65分。猿之助の宙乗りは随分見たが、狐忠信が最も素晴らしい。鼓を与えられた喜びが、宙乗りによって存分に表現されている。帰宅後、急ぎ旅支度。夜行で大阪へ出発。

○1月5日(火) 道頓堀・中座で『忠臣蔵』の通し。延若・扇雀を中心に、純上方風の演出で見せるという。これは十一年振り。昭和五十二年に東西で競演したときは、当時の上方の役者総出、扇雀のおかるがきれいで、璃瑠の伴内が面白かった。中座に着くと、延若は病氣休演。配役が変更になり、延若の早替りがお目当ての『大津繪道成寺』も差替え。入口で東京在住の友人に会い、またびっくり。

一緒に昼の部を観る。大序から六段目まで、4時間25分。扇雀が由良之助と勘平、田之助が判官とおかる。二人が出づっぱりの印象で、変化に乏しい。しかし、田之助のこの二役は、東京ではお目にかかれない。徳三郎の一文字屋お才は京言葉。じゃらじゃらした、それであふれるばかりの色氣。夜の部は、「七段目」90分に、義士外伝『忠臣連理鉢植』40分と『乗合船』53分の芸尽くし。それにしても、まだ松の内だというのに、入りは七分といつたところ。歌舞伎座が連日満員、そして、わざわざ東京から出かけて来る物好きがいるというのに、関西の人はどうして歌舞伎を見ないのだろう。

○1月6日(水) 午前中、梅田の大丸で、柿衛文庫蔵「与謝蕪村と門人たちの書」。午後、ミナミの街を抜けて、国立文楽劇場へ。角座に代わって演芸場になった浪花座では、浪曲の京山幸枝若が歌謡曲を歌っている。大阪ならではか。文楽夜の部は、4時開演。『良弁杉』137分と『卅三間堂』58分の由来譚二つ。「二月堂」は、暮れの歌舞伎と合せて観る。越路大夫一時間に及ぶ熱演だが、やはり古い物に比べて、詞章が説明的であるように思う。それでも、人形の演じる方が感動

が深いのか、年輩の女性は目頭を押さえている。『卅三間堂』は、義助のお柳の独壇場。信田妻や夕鶴も哀しいが、母親が物言わぬ柳木になり、それも子供が挽出すというのは、一際胸を打つ。芝居を見過ぎたのか、酒の飲み過ぎか、最終の新幹線に乗ると、そのまま眠ってしまう。

○1月8日(金) 下北沢・駅前劇場で、ソントン・ワイルダーの『わが町』(末木利文演出)。読売新聞の神吉拓郎の紹介が魅力。彼も墓場の死者の役で舞台に出ている。小さな田舎町の日常を淡々と描く前半50分、死者の会話を通して人生の意味を問う後半40分の短い芝居だが、八十歳を過ぎた中村伸郎の進行係が、演技を超えた「演技」で絶妙。晩年の林家正蔵(彦六)の高座を聴いているときのように。一緒に行った同僚四人、芝居がハネて外へ出ても、声がつまって、誰も口をきけない。その一人がうまいことを言った。「さあ、お泣きなさいと言ってるような芝居だ」と。街はずれの古ぼけたバーで深酒。午後二時帰宅。ところで、『わが町』の翻訳を取めた講談社世界文学全集第88巻が既に品切れ。どなたかお持ちの方、お貸し下さい。